

【 家庭科 】 教科提案

自らの生活を実感し

工夫する楽しさを味わう子どもを育てる家庭科学習

～自分の課題をもって対象にはたらきかける子どもの姿をめざして～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 家庭科における学びと育ち

家庭科の学習は、人やもの、環境などのかかわりを大切にしながら、食べることや着ること、住まうこと等を扱っていく。学習対象は、子どもたちにとって身近な家庭生活や家族、学校生活や仲間などの身近な人やもの、自然などの環境である。自分の家庭生活からスタートし、学んで身に付けた力を日々の生活で実際に生かしていくという、授業と生活の間で学びが連続していることが大切となる。学んだことが、毎日の暮らしの中で役に立っているという実感を子どもたちがもてたときや、家族に喜んで受け入れられたり評価してもらったりしたときに、一層意欲的になったり自信を持ったりする姿につながると思われるからである。

時代や社会の変化に伴って、生活は大きく変容し続けている。いつでもどこでもほしい物が手に入る便利さの中で子どもたちは生活し、一方では、自分で実際に手や体を動かし何かを作る、家族の一員として家庭の仕事を分担する、というような実際の生活体験は減少してきている。生活が便利になったり簡略化されたりした結果、あまり生活を「意識」することなく過ごすことが可能となっている。その結果、多くの子どもが、家族の一員として自分の役割を考える機会をもつことなく、家族のありがたさや家庭生活のよさに気がついていないと考えられる。

また、情報化が進み、技術や経済が発達していく中で、衣食住の生活の多様化が進み、それに伴って家族や家庭生活における生活観も多様化してきている。情報が氾濫する中で、多くの知識をもっている反面、宣伝や見かけなどの影響も受けやすく、偏った見方をしてしまうこともある。自分をもっている知識をもとにして調べたり考えたりしながら適切に判断しながら、生活の中で生かしていく力が必要となってくる。

このような社会の中で生きていく子どもたちにとって、将来、自立した生活を行っていくための力を身に付けていくことは重要である。まず、自分自身の生活を見つめなおし、生活に必要な基本的な知識や技能を身に付けていくことが必要である。そして、それらをもとにして、よりよい生活を考えながら工夫しようとする創造力や、情報を上手に活用しながら、状況にあったふさわしいものや便利なものものを選ぼうと取捨選択する能力を養っていく必要にせまられているといえる。

(2) めざす子どもの姿

家庭科の授業といえば、調理実習や製作実習というイメージをいただいている子どもが多く、授業で取り入れる体験活動や調理実習、製作実習への関心は高い。このような活動を取り入れた学習は、子どもたちにとって楽しみなものであり、すすんで工夫を凝らしながら学んでいく姿を見取ることができる。例えば、調理実習であれば「おいしいものを作りたい」「盛りつけ方をかわいらしくしよう」などという思いをもって、自主的によりおいしい・より簡単だと思われる作り方を調べてきたり、家庭で試し調理を行ってきたりする子どもの姿もみられた。毛糸で編んだ小物作りを行うと、自分のイメージしている作品に近づけていくよう、色や形を考えたり飾り付けを行おうとしていた。

体験活動や実習などの活動への関心は高いものの、毎日の生活の中で当たり前のように行われている衣食住などの生活行為・活動に対して、子どもたちはあまり意識しないですごしていることが多い。例えば、自分が着ている衣服の役割について考えてみたり、自分の住まい方について考えたことのある子どもは少ないだろう。

家庭科の授業の中で、子どもたちが自分の生活を見つめなおし、学習のもつ意味をしっかりと獲得しながら生活に返していけるような子どもの学びの姿をみとっていききたいとねがっている。そのために、子どもの実態をしっかりと見つめながら、具体的な数値を示したり、視覚・聴覚・味覚・嗅覚などで実感する活動を取り入れたり、実験を取り入れたりといった手だてをとっていききたいと考えた。

また、適切に体験活動や実習を取り入れていくことで、「おもしろそう」「やってみよう」と、子どもたちの興味・関心を高め、そこから「なぜ、そうするのか」「自分に今必要なものは何なのかな」と、問いや問題意識をもたせていった。

以上のことから、家庭科学習でめざす子どもの姿を次のように考えた。

◇ 学習活動の価値を実感できる子ども

自分のはたらきかけがよりよい生活を創り、将来にまでつながるという学習の価値をわかり、主体的に考え、行動できる子ども

◇ 自分の課題（問いや問題意識）を持って活動できる子ども

子どもたちの家庭生活は個々様々であり、それぞれの課題は異なるものである。主体的に学習をすすめていく中で、自分にふさわしい課題を見つけ、自分に合った解決へと思考をこらす子ども

◇ 工夫することのよさや楽しさを味わえる子ども

家族や家庭生活を大切に思い、よりよくしたいとねがいながら、対象への思いをもって、ふさわしいと考えられるはたらきかけをしようと創意工夫する子ども

研究テーマ

自らの生活を実感し、工夫する楽しさを味わう子どもを育てる家庭科学習 ～自分の課題をもって対象にはたらきかける子どもの姿をめざして～

子どもたちが意欲的に学習をすすめていくためには、子どもが自らの生活の中にある問題に気づき、それを解決するための知識や技能を身に付けたいとねがい、身に付けた知識や技能を生かしたいという強い思いを抱くことが必要である。そして、生活への実践にあたっては、身に付けた知識や技能をどのような形で、どのような願いやこだわりをもって実生活に生かすことができるのかという点を特に大切にし、個々の子どもが自分に必要だと思われる課題をもって取り組んでほしいと考え、研究テーマを設定するに至った。

(研究仮説)

- ・ 自らの生活を実感することが、自らの生活の中の問題やよさを発見することにつながっていくだろう。
↓
- ・ そこから自分に必要だと思われるテーマをもつことによって、真剣みのある学習活動が展開されることになるだろう。また、正しい知識や技能の習得の必要性を実感することができるだろう。
↓
- ・ 自分の生活にあった実践へとつなげるために、よりよい生活を創るための工夫を取り入れることの楽しさを味わう子どもの姿が見られるのではないか。

(3)「意味と内容」がひろがる家庭科の学び

家庭科学習において学習する「意味」とは、題材を学ぶ目的であり題材のもつ価値である。「内容」とは、「意味」を子どもたちが獲得していくための学習内容である。「意味と内容」がひろがる学びとは、「毎日の自分の生活の中で使ってみたい」「どのような形で取り入れたら、よりプラスになるのかな」などの思いをもつ子どもの姿が、自分らしい実践につながる学びのことである。自分たちの生活を支えている、もの・人々・自然など、いろいろな対象について、実際の生活と関連させながら学習を深めていくのである。

例えば、1学期に学んだ題材「元気！大好き！朝ごはん！」の学習をすすめる際、なぜ朝食をとる必要があるのかという学習の「意味」を獲得するために、子どもたちは調べたり聞きとり調査を行ったり、または自分の体験から考えたりと学習「内容」を展開していった。朝食をとることの必要性を感じた子どもたちは、今の自分の生活を見つめなおすこ

ととなった。そして、毎日の生活でバランスよく朝食をとるためにはどうすべきなのか、何が必要なのか、自分の課題を見つける。それぞれの子どもがもった問題意識を自らの課題とし、よりよい生活をねがいながらこだわりをもって対象にはたらきかけようとする子どもの姿が、家庭科学習における「意味と内容」をひろげる子どもの姿である。

4. 家庭科学習でのまなざしの共鳴

[研究テーマとかかわって ～まなざしを共有し合える題材の設定～]

題材を設定するにあたっては、ごく一部の指定された題材をのぞいて、ほとんどは子どもの実態と照らし合わせながら、自由に身近で日常的な題材を設定できることになっている。例えば、調理に関してであれば、「米飯およびみそ汁の調理ができること」をのぞいては、「日常よく使用される食品を用いて簡単な調理ができるようにする」という内容となっており、子どもの実態に合わせて弾力的に内容を組み合わせ、計画していくこととなっている。家庭科学習において、題材の設定は大変重要であり、子どもや地域、学校に対応した、子どもにとって身近に感じられる、互いのまなざしを共有し合える題材の設定を行うことが必要となってくる。また、そうすることによって自らの生活を実感し、生活のよさや問題を発見する子どもの姿のあらわれにつながりやすいと考えられるからである。

子どもたちのそれぞれのまなざしをみとるには、日頃の子どもの姿をよく見つめ、かかわっていく必要がある。子ども一人一人にそれぞれの家庭生活があり、家庭に対する思いも様々であり、日々変容していくものであるからである。子どもたちは、自分が身近に感じられる学習の中で気づいたことやわかったことなどを互いに共有し合うことによって、共感したり、誘発したり疑問をぶついたりしながら、互いを刺激し合い、高め合う学びが展開される。子どもと教師、子どもどうしの間におけるまなざしの共有が、互いのまなざしを共鳴し合う学びにつながることでないと考えられる。研究テーマとかかわって、題材の設定を行うにあたっては、次のような視点をもって行いたいと考えた。

- ・子どもの家庭生活や学校生活において、日常にありえるもの
- ・子どもにとって親近感をもて、簡単に取り組めるもの
- ・子どもの個性を生かした取り組みが期待できるもの
- ・解決しなければならぬと実感できるもの
- ・解決後、子どもの生活の中での実践につながるもの

子どもたちが真剣な中にも自分の思いを出し合える学級風土を大切にしながら、いかに教師が子どものまなざしを共有し、題材の設定、題材の計画を行っていくかが、子どもどうしのまなざしの共鳴へとつながっていくことになった。